

## 1. 「障害者アート」の名称、定義、範囲

### (1) 名称及び定義について

「障害のある人たちが創造するアート」については、日本において定着した名称がないのが現状である。本懇談会においても、その概念・名称・定義について様々な意見が交わされたところであるが、本とりまとめでは、特に厳密な定義はせずに、「障害者アート」という名称を用いていくこととする。

関連する概念・表現として、「アール・ブリュット」、「アウトサイダー・アート」などがあるので、以下にこれらについて述べることにする。

「アール・ブリュット」とは、フランスの画家ジャン・デュビュッフェによって考案された言葉であり、「加工されていない、生きの芸術」を意味する。デュビュッフェは、精神障害のある人や幻視家などが制作した絵画や彫刻をアール・ブリュットと呼び、それらの美術の専門教育を受けていない人々の作品を「もっとも純粋で、もっとも無垢な芸術であり、作り手の発想の力のみが生み出すもの」と高く評価した(DNP Museum Information Japan <http://www.dnp.co.jp/artscape/index.html> より引用)。スイス・ローザンヌ市には、デュビュッフェのコレクションの寄贈により設けられた「アール・ブリュット・コレクション」の収蔵館がある。

一方、「アウトサイダー・アート」とは「既存の美術制度の外部にあって、しかも自らの行為をアートと認識することのない者によって営まれる美術活動、もしくはその活動の結果生まれた作品の総称」であり、美術教育を受けていない独学者や子ども、精神病患者らの作品が含まれるのをはじめ、場合によっては非西洋圏の民俗美術もこの範囲に含めて考えられることがある(DNP Museum Information Japan 同上HPより引用)。アウトサイダー・アートとアール・ブリュットは共通する概念も多いが、必ずしも同一ではないとされている。

このほか、日本においても「エイブル・アート」(注1)、「ボーダーレス・アート」(注2)等の概念に基づき、障害者のある人たちの芸術活動を推進する試みがみられる。

#### (注1) エイブル・アート

・障害のある人たちのアートを〈可能性の芸術〉としてとらえ、生命力を失いつつある現代社会を生きる人たちがアートを通して人間性を回復させ、さらに芸術と社会との新しいコミュニティーを築いていく市民芸術運動(NPOエイブル・アート・ジャパン)

#### (注2) ボーダーレス・アート

・障害のある人の表現活動の紹介に核を置くことだけに留まらず、一般のアーティストの作品と共に並列して見せることで「人の持つ普遍的な表現の力」をリアルに感じ、そうすることで、「障害者と健常者」「福祉とアート」「アートと地域社会」など、様々なボーダー(境界)を超えていくという、果敢な試み(ボーダレス・アートミュージアムNO-MA(滋賀県近江八幡市))

### (2) 障害の種別及び芸術の分野について

本来であれば、身体的・精神的・知的な障害を問わずあらゆる障害者が関わる美術や音楽などの様々な分野における芸術創造活動について、本懇談会でも取り上げることもできたであろう。

しかしながら今回は、限られた時間内で、より具体的な審議を行うため、特に最近取組が活発化している知的障害者・精神障害者による美術の活動に焦点を当てて検討し、提言をとりまとめることとした。今後は、これ以外の障害種別・芸術分野においても、同様の取組が活発化することが期待される。

## 2. 「障害者アート」を推進する意義

前述した「アール・ブリュット」をはじめ、欧米においては「障害者アート」への取組は20世紀初頭から見られ、著名な画家や医師、研究者などを中心に調査研究が続けられてきた。美術界からの関心も高く、特に前衛芸術家たちの中には大きな影響を受けた者も少なくない。それに比べて我が国では、「障害者アート」に着目する動きは早くから存在するものの、きわめて限られた有識者が関心を持っていたにすぎず、欧米と違って美術界からの積極的な働きかけも最近までなかったと言える。戦後日本における「障害者アート」の画家としては山下清がおり、彼の作品は全国各地で非常な人気を呼んだ。この他にも、障害者の創作した美術作品の展覧会が高い評価を得たこともあるが、これらの作品は我が国美術界の中で明確な位置づけを得るには至らなかった。

その理由としては、我が国において「障害者アート」への見方が教育的効果、福祉の向上への取組との強い結びつきに偏っていたことがあげられる。知的障害などのある人々は、せっかく芸術的な才能があってもそれを理解する人間が絶対的に少なく、更に、そういった人々に自由な芸術作品の制作を通じた自立を促すという考え方は生まれてこなかった。むしろ、芸術創造活動を通じて障害者への生きがいやリハビリなどの向上に対して大きな関心が向けられてきたのである。

日本で「障害者アート」が一般的な認知を得たのは、ごく最近のことである。その端緒となったのが1993年に世田谷美術館で開催された展覧会「パラレル・ヴィジョンー20世紀美術とアウトサイダー・アート」であると言われている。現在では、ボーダレス・アートミュージアムNO-MA(近江八幡市)やアトリエ インカーブ(大阪市)の活動に見られるように、全国各地の施設や団体で障害者アートが取り上げられ、特色ある取組が進められているところである。

ごく最近では、アール・ブリュット・コレクションと日本のアウトサイダー・アートの作品を同時に展示する試みである「アール・ブリュット/交差する魂」展が北海道、滋賀、東京の三ヶ所で開催されている例がある。

障害のある人たちによる優れた作品は、それが持つ圧倒的な力でもって現代美術の世界に大きなインパクトを与えていることは、今日においては疑いがない。したがって、「障害者アート」の芸術性を高めていくことにより、現代美術の更なる振興を期することができよう。一方で、それは作り手を社会的に支援することにもつながる。多くの美術家が創作活動により生計を立てようとするのと同様に、障害の有無に関わらず才能のある芸術の担い手として認められることで、社会参加が促され、自立した生活も実現可能になるのである。